

## 人類社会の進化史的基盤研究(1) (2008年度第2回研究会)

日時：2008年5月11日(土) 午前10時～6時半

場所：AA研小会議室(302)

内容：1. 黒田末寿(AA研共同研究員、滋賀県立大学)

「霊長類社会の平等原理と集団」

2. 寺嶋秀明(AA研共同研究員、神戸学院大学)

「サルの集団／ヒトの集団、サルの平等／ヒトの平等」

3. 田中雅一(AA研共同研究員、京都大学)

「ネットワーク編成における誘惑と信頼-エージェンシー論の視点から」

---

### 1. 霊長類の社会集団と平等原則

黒田末寿(滋賀県立大学)

#### 問題の所在

1.0 人間のおとな(ここでは独立個体と呼ぶ)同士は基本的に対等である。ホブスやルソーの社会論も個人間の対等性を前提に議論を展開している。だからこそ万人の万人に対する闘争という事態が想定され、その混沌の解消は、王や一般意志、あるいは神の代理者という超越機関を作るほかに道がないわけである。対等は自己が相手に支配されないことをそれぞれが是とすれば出現する。これは互いに避けあうことによっても出現する。いっぽう、平等は自己と他者が相互に対等であると確認できる状態と言えいいだろう。したがって、平等は相互性を意識できる個体たちが作り出す関係で、同一集団内の個体関係である。

1.1 伊谷(1987)は、ニホンザルとチンパンジー属(チンパンジーとボノボ)の集団内における平和的個体間交渉には優劣関係を前提にしたものと対等(対称)なもの2タイプがあるが、いずれも共存のあり方とし、前者を不平等原則、後者を平等原則と名付けた。さらにこの分類に沿って、ニホンザル社会は不平等原則が優越する社会であり、チンパンジー属の社会は平等原則が台頭した社会で狩猟採集民に見られるような平等主義社会にむかっていると結論した。

これは、現生霊長類の集団内共存システムを行動パターンで比較・分析することで、霊長類社会のなかに人類社会を位置づけ、その出現過程を説明しようとしたものである。伊谷は1.0にあるような、平等の前提である相互関係が意識できることについては述べていないが、チンパンジー属の平等原則を構成する行動には食物分配や同盟関係における互酬性があり、彼らがこの意識を「ほぼ」獲得していることを示している(黒田1999)。したがって、その平等原則は行動レベルだけでなく人類社会の意味での平等に「ほぼ」そぐう実質をもっている。

1.2 いっぽうで、霊長類は、全種の約90%が安定で個体認知し合う社会集団を形成して生活するという特性をもっている。霊長類の社会集団同士は、一般的に対立・排除し合い、とくにチンパンジーでは、集団間で殺し合いが見られている。10月4日の発表は、伊谷の議論とこの霊長類の集団形成の特性を統合して理解する試みである。この作業において重要なのは、今村仁司の第3項排除論の原型、「敵が味方をつくる」という鳥類・ほ乳類一般に普遍的な現象(対敵連帯原則)である。しかし、この議論を整合的に進めるには、伊谷の議論をいくつかの点で修正することになった。

## 議論

1.3 伊谷は、霊長類社会において不平等原則から平等原則へ進化を想定しているが、これらは霊長類の社会構造と深く関連しており転換不能と考えた方がよい。不平等原則と平等原則は一つの種の社会集団で並立しているのだが、不平等原則を確立した社会から平等原則の社会に進化するとは考えにくい。

1.4 チンパンジー属の順位は、高位者の努力と支援者の存在によって維持され、不安定である。ニホンザルの順位とは起源と機構が異なり、別物であって、そこには不平等原則は働いていない。つまり、チンパンジー属はすでに徹頭徹尾平等原則で生きている動物である。

1.5 ニホンザル社会での不平等原則を出現させる抑制と、チンパンジー属社会での平等原則を出現させる抑制は異なる。前者は逸脱を伴わない「代理本能」的な抑制(=身動きならぬ抑制)、後者は逸脱を伴う不完全な抑制である。この不完全な抑制は抑制の存在をあらわにし、欲求と乖離した社会意識の存在を自己と他者に提示する、すなわち社会意識の源である。

1.6 不平等原則は順位による個体の社会秩序と等値であり、集団の独立成員はこの秩序に組み込まれている。すなわち、不平等原則社会の外延はメンバーシップと一致し、不平等原則が集団統合にも機能する。いっぽう、不完全な抑制は基本的に不安定であり、それにもとづく共存原理維持には、不断に働く補強的装置(敵の存在)や他の集団原理による下支えを必要とする。不平等原則社会でも集団間の対立はあるが、平等社会の集団間の対立はそれと質が異なり、「集団の枠を作り出す」ための対立と言える。

1.7 集団間で敵対するチンパンジーとちがってボノボの集団同士は平和共存できる。ボノボは性器接触を同性・異性間ともに発達させて、葛藤を解消する類人猿であり、性行動と雄の母親への依存の長期化が集団統合の軸になっている。異なる集団の雄同士は対立的だが、雌間の平和交渉(性器接触)と雌の雄に対する対等性ないし優位性が雄間の対立を溶解させている。ボノボにおいては性交渉が優越し、この強力な連帯形成・維持機能によって、平等原則と対敵連帯原理との結合が弱まっている。

## 結論

○伊谷平等性起源論の修正。人間社会の平等性は類人猿と共有する性質で、それ以前の段階からの遺産である。

○平等原則は集団形成・維持を保証しない。統合原理の補完が必要である。統合原理としては、人間ではアイデンティティ機能を持つ文化、分業、言語、血縁=<父・母><父祖>の発明、絶対者の発明、地縁などがあるが、チンパンジー属では母子・兄弟姉妹関係、共同、互酬性、性行動、敵など、より始原的な段階にとどまり、小規模集団統合にしか有効でない。敵はとりわけ重要である。

○人間社会の制度的不平等は平等原則の動物が二次的に作り上げたもので、ヒト以外の霊長類の不平等原則とは起源も機構も異なる。といっても、霊長類の不平等原則も「自然に、本能的に」構成されるのではなく、社会的に構築されるものである。

## 2. 「サルの集団／ヒトの集団、サルの平等／ヒトの平等」

寺嶋秀明（神戸学院大学）

### 集まることのやるせなさ（サルの集団・ヒトの集団，サルの平等・ヒトの平等）

#### ■霊長類の集団

霊長類の社会は，単独生活者からなる原初的な社会をそのプロトタイプとしてスタートし，その後，大きくペア型と群れ型の二つの流れに沿って進化し，さらに群れの大型化や継承性の確立などいろいろな方向性をもって構造的に発展をとげてきたとされる（伊谷純一郎1987「霊長類の社会構造」）。現存の霊長類の諸種が持つさまざまな社会構造は，それぞれの種のまさに歴史を映し出しているものなのである。一方，集団の進化はたんに形態的な問題だけを論じてすまずわけにはいかない。そもそも，なぜ動物は群れるのか，あるいは集まるのかという群れることそのものに関わる根本的な問題が問われなければならない。この発表ではさまざまな角度から霊長類と人の集団の根源的問題にアプローチを試みていきたい。

#### ■集団の条件

霊長類の諸種の群れは少なくともメンバー相互の認知と共存の許容を前提として存立していると考えてよいだろう。そこにおいては，各メンバーは群れそのものへのアイデンティティをもち，いわば「われわれ意識」によって群れの輪郭が形成されている。ただし，群れの輪郭は決して固定されたものではなく，時として大きな流動性を見せる。そういった群れの輪郭の柔軟性は，「われわれ意識」の揺らぎと相関しているものである。とくに人間においては群れへの帰属は決して単一ではなく，多くのアイデンティティが重なりあう。他の集団との関係も，あるときに

は競合関係にある対立集団として、またときには、協同関係にある仲間集団として、すなわち「われわれ意識」が敷衍される対象として現れる。このように、状況に応じて集団の分節構造や入れ子構造が生成され集団の輪郭が動的に生成される。

群れへのアイデンティティは複数の個体が集合するための条件ではあるが、群れそのものは必ずしも集合する必要はない。すなわち集合していない群れといった状態も存在する。いわば表象としての群れであるが、これはけっして人間特有のものではなく、すくなくともチンパンジーなど類人猿段階ではかなり根本的な群れのあり方として存在することがわかっている。

#### ■集団と個との関係

集団とそこに含まれる個体との関係は複雑である。集団に属することによってそれぞれの個体は、身の安全や個体繁殖の機会の増大などの一定の利益を得るとというのが進化生態学の説くところである（長谷川寿一・長谷川真理子2000『進化と人間行動』）。たしかに個体が群れの一員として生きることにはそういった生物学的な利点があることはまちがいないのだがそれは群れることの前提条件であって目的ではないだろう。日々、生身の身体として生き抜いている個体にとっては、群れはそこに集って生きることの魅力に富んでいる場所であるがゆえに選択されるのである。それはたとえば複数の個体間の身体接触も含んだ社会交渉の魅力であり、身近な場所に共にいることそのこと自体の魅力にほかならない。その一方で集団に属することは個体の行動の自由に対する拘束をもたらし、劣位者においてはさまざまな自制を強いられるものであり、あるいは他個体からの攻撃が発生する場となりうる。群れと個体とはそういった協同性と拘束性、魅

力と不安，興奮と疎外といった種々の対立変数によって関係づけられ，それぞれの個体はそうしたアンビバレントな環境のなかで，いわばやるせない生を生きているのである。

## ■集団と平等化・不平等化

霊長類の行動における平等および不平等原則の存在は伊谷純一郎によって発見された（伊谷1986「人間平等起原論」）。伊谷は，ニホンザルの群れのような大きな集団の成立には不平等原則とその表現型としての順位制の確立が不可避であったと論じている。また，その裏側で平等原則に基づく行動によっても複数個体の共存が可能になっていると述べる。集団とはとりもなおさず，複数個体の共存によって支えられる。その共存の基盤を支えるのが平等・不平等という行動原則なのである。

一方，平等・不平等たんに共存の原理というだけにとどまらず，集団の生成という社会の基盤そのものに関わる場においてもきわめて重要な働きをしている。それは，関係や状態の描写としての平等・不平等ではなく，平等・不平等をアクションとして捉えることによって判明するものである。すなわち，そこでは，平等とはある行為をもって集団を平等化＝差異を消滅することであり，また，逆に，ある行為によって集団を不平等化＝差異をきわだたせることである。集団を構成する個体のあいだにはさまざまな差異があるが，それらはそのままでは意味をもたない。その差異が階層性という不平等な制度に昇華したり，あるいは逆に，差異を無化して平等性を出現させるために，集団においては随時このような平等化あるいは不平等化のアクションが発生しているのである。そのアクションが投げられる集団そのものにおいては，必然的にその輪郭がきわだつ作用が生まれている。平等・不平等は集団の輪郭を鮮明にし，集団を構造化する契機である。

一方、集団は、アクションの対象として平等化・不平等化のアクションそのものを可能にする場なのである。

### ■行動と平等・不平等

ヒト以外の霊長類における平等・不平等はもっぱら個体の社会行動をとおして捉えられるものである。それは結論から言えば相称的行動と非相称的行動の二分法によって語られる。相称的行動は相称的関係すなわち平等を創出し、一方、平等な関係のもとに相称的行動が演じられる。逆に、非相称的行動は非相称的関係すなわち不平等を創出し、その不平等な関係のもとに非相称的行動が出現する。人における平等・不平等は一見はるかに複雑な様相を呈しているが、根本的にはやはり相称的行動と非相称的行動が果たしている役割は大きい。そこにヒト以外の霊長類と人間社会との接点がある。その上で、人における平等的行動の展開は、一方では行為そのものの相称性から、行為の結果の相称性へ、また、身体レベルでの相称性から、表象レベルでの相称性へといった方向での発展がなされ、人間社会に独自の刻印を見ることができる。

### ■共存と非構造

上述のように、平等原則ならびに不平等原則に基づく行動は、複数個体の共存を可能にするものであり、平等・不平等が共存と深く関わっている。一方、共存における個体間関係には平等・不平等を超えた部分も少なからずある。前述のように集団においては、随時、平等化・不平等化のアクションが生起し、集団の輪郭を顕在化させているが、その構造化のレベルは時間とともに低下し、集団は非顕在的になる。ここにおいては、平等・不平等を離れて、各個体が適当に距離

を置きながらも離散しない状態になる。これはむしろ「非構造」に近いものである。さまざまな動物における「混群」は、種という垣根を越えてまで群れがその許容範囲を拡大する現象であるが、構造としての非構造と考えることもできるだろう。同時に人間の集団においてもそういった事例は少なくない。

### ■人の集団の特徴

人の集団の特徴は、第一に家族とコミュニティの同時存在である。家族はコミュニティの基盤をなす具体的輪郭を持った単位であるが、家族だけで存続してゆくことはできない。一方、家族を超えたコミュニティは家族を含み、そこに性を閉じ込めることによって性をコントロールし、社会を安定化させることを可能としている（山極寿一 2007『暴力の起源』）。このように家族とコミュニティが支える・支えられるという相互依存的関係に立ち、両者は、それぞれ固有の輪郭をもちながらも「重なりあって」存立している。さらにコミュニティは、幾重にも重なって、個人のアイデンティティを重層化している。

人の集団の特徴をなすこのような重層性、多重性、重なりあいは、集団に依拠しながらもときに集団を超えて生きる能力を人間にもたらしている。牧畜社会に特徴的な略奪をお互いに繰り返しながらも、なおかつ地域社会として存立してゆく姿はまさに、人間における共存の徹底的な拡張として位置づけられるだろう（河合香吏 2004「ドドスにおける家畜の略奪と隣接集団間の関係」）。

## ネットワーク編成における誘惑と信頼

田中雅一（京都大学人文科学研究所）

### 1 はじめに

本報告では、集団概念およびその進化を考えるうえで無視できない「ネットワーク」について、考察を深めたい。ネットワークについてはふたつの視点を見て取ることができる。ひとつは歴史的な視点である。ここでネットワーク（社会）とは、現実にはわたしたちが直面している社会の様相で、とくにコミュニティの崩壊や都市化との関係で語られてきた。

もうひとつは理論的な視点である。この場合、集団をネットワークの視点から分析することの有効性が強調される。それは歴史や地域に関係なく、普遍的に認められる人間関係のあり方である。それは、個々人の結びつきを意味する。ただし、先行研究について検討していくと、これらふたつの視点はかならずしも厳密に区別されていない。この点を考慮しつつ、論を進めていきたい。

### 2 ネットワーク論

ノルウェーの漁村で調査をした J・A・バーンズは、ネットワークは以下のように定義されている。「個々人は一定数の他者と接触を保っていて、その人たちの一部は相互に直接の接触があるが、相互に接触のない人々同士も含まれている。・・・私はこの種の社会的な場のことをネットワークと呼ぶのが便利だと考えている。私の頭に浮かぶのは、一組の点のうち一部が相互に線で結ばれているというイメージである。このイメージのなかの点は人あるいは集団を表しており、線はどの人とどの人が相互作用しているかを示している」（バーンズ 2006 : 7）。また、アフリカの鉱山都市地帯で調査を行ったエプシュタインは、ネットワークとは、1) 「常にエゴ中心的である」、2) 「常に個人的である」、3) 「個人的相互作用の、一連の鎖の連結」[エプシュタイン 1893 : 99-102]などと分析している。

理論的な視点に限れば、ネットワーク概念は、全体をまず想定する構造概念を批判する形で生まれた。人類学では、マンチェスター学派がネットワーク分析を 1960 年代に提唱する形で普及する。その背後には、都市や産業社会での研究がある。ネットワークは、役割（権利・義務）の束として人間をとらえる構造機能主義からは見えてこない人間関係（つきあい）を明らかにする概念である。ほぼ対等で、境界がない、どこまでも広がる対面的な二者関係が、そこでは想定されている。

ジェレミー・ボワセベンは、こうしたネットワーク概念の提唱と、「個人」の発見あるいは強調を認める。

「インフォーマントが「この場面で私には何が期待されているだろうか」とか、「私の集団にとって何が最善だろうか」といった、構造-機能主義者の典型的な問題をしばしば自問するのは確かに事実だ。しかし、経験的にいえば、彼らはそれと同じくらい煩雑に「自分と自分の家族にとって何が最善だろうか」とか、「どの可能性から最大の利益を引き出すことができるだろうか」・・・といった自問を繰り返しているように思われる[ボワセベン 1986 : 22]。

要するに、社会の静態的な構造-機能主義モデルは、現実の人間が相互作用するレベル

では役に立たないということが、・・・明らかにになってきたのである [同上]。

ネットワーク論は、ノルウェーや東ロンドンなどでの人類学的調査から生まれ、発展したが、それは都市社会学、社会的ネットワーク論、グラフ理論 サーベイと統計などへ受け継がれ、発展していく。他方、人類学に限れば、都市社会だけでなく、集団の拘束性が弱い狩猟・採集社会や双系社会などの人間関係を考えるうえで有効とされている。これらの研究の代表的なものが、J.C. ミッチェル編の『社会的ネットワーク——アフリカにおける都市の人類学』1962 (*Social Networks in Urban Situations: Analyses of Personal Relationships in Central African Towns* Manchester University Press)である。その一部は、野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』(勁草書房 2006) にも収められている。

さて、先にも少しふれたが、ネットワークが個人間の関係を意味するとするなら、それが結びつける個人とはだれか、ということが問われなければならない。ここで、本報告ではエイジェント(代理主体)という概念を導入したい。以下では、報告者が想定しているネットワークとエイジェントとの関係を示す引用を3つ挙げておく(詳しくは、[田中 2002, 2006a, 2006b]を参照)。

まず、エイジェントとネットワークは表裏一体であることを強調したい。あるエイジェントは、つねに前景にあり、ネットワークを操作するのでもないし、また後景にあって、ネットワークやほかのエイジェントによって操作されるのでもない。エイジェントは、あるときに前景に出て、その意志や行為を他者に向けて働きかける。しかし、別のときにはほかのエイジェントやネットワークによって働きかけられる。それだけではない。エイジェントは本来代理という意味がある。エイジェントはそれだけで完結する個人ではない。それは、旅行代理店といった言葉からも明らかのように、ほかのエイジェントの代理として働く、代理として行為する。だからと言って、操られているわけではない。その意味でわたしはエイジェントに「代理主体」という訳をあてたい。エイジェントは他者のエイジェンシーを前提として生まれるのである。

つぎに、ネットワークは、たんに数あるエイジェントを結びつける絆を表すのではない、と指摘したい。それは、エイジェントが活動する基盤・資源としてはたらく。これは、社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)論と共通する視点である。

最後に、ネットワークの性格である。すでにネットワーク概念が集団性よりも個人性を強調する概念であることを指摘したが、その個人性は、かならずしもボワズベンが想定していたような合理的かつ競争的な個人である必要はない。むしろ、非合理的、身体的な存在であると考えたい。

社会科学において、集団か個人かという問いかけは、個人を能動的に取るか(すなわち個人中心)、受動的に取るか(すなわち社会中心)という二者択一的な選択と表裏一体にあったと思われる。ネットワークとエイジェントとふたつの補完的な概念は、こうした二者択一的な選択から自由でなければならない。そのために注目したいのは、エイジェントの性格(能動か受動か)ではなく、エイジェントによるほかのエイジェントへの働きかけの性格に注目したい。その際、誘惑や信頼が重要となる。なぜなら、これらは受動と能動を逆転させるような概念であるからだ。

### 3 誘惑と信頼

「誘惑」という言葉に注目する意義はどこにあるのだろうか。ひとつは「主客の逆転」、もうひとつは身体の重要性の2点に求められる。まず前者について述べることにする。

誘惑には、能動する主体と受動する客体との転換——絶え間ない逆転——が含まれている。誘惑は、なによりも誘惑者(主体)の能動的なはたらきかけである。ところが、この能動性が究極

的に求めているのは、誘惑される側の能動性なのだ。それによって、誘惑する主体は、受動する客体になる。だが、もちろんそれは単純な主客の入れ替わりを意味しない。誘惑者は能動性や主導的な立場をまったく喪失するわけではないからだ。

立川健二は「誘惑するとは、・・・積極的に他者に働きかけることではあるが、にもかかわらず、他者に従属した弱い立場にたつことである」[立川 1991:39]と述べている。また、フランスの思想家ジーン・ボードリヤールは「誘惑とは、弱点を攻めるようにと他者に呼びかける挑発」[ボードリヤール 1985:110]と語る。誘惑者は、他者に能動的になれ、とはたらきかけるのである。

だが、誘惑とは、する側が挑発し、される側がこれに乗ることで完結するのではない。むしろ、こうした関係が繰り返し行われることで最終的に主客の転換から、「自他の相互転換」へ、さらに「自他の融合」へと進むのである。成功した誘惑は誘惑の痕跡を残さない。失敗したときのみだれが誘惑者だったのかという責任者探しが始まるのである。

誘惑がきわめて身体的な行為であることは自明であろう。身体的であるゆえに、自身の意図で管理できないという事態が生じる。その気がないのに相手は誘惑されていると勘違いする。抑えるべきところで肉体的欲望が生じるなど、誘惑をめぐる困惑の事例には事欠かない。

一方で誘惑とはオーラルな交渉でもある。「口説く」という日本語はそうした誘惑の性格を示唆している。しかし、誘惑は、声で行うものであって、言葉で行うものではない。すなわち、誘惑は、身体で、そして、その延長である声で行われることを意味する。誘惑における声とは、分節可能なメッセージ(言葉)の媒体などではない。それは、「身体」なのである。誘惑者は、ときにまなざしで、ときに声でわたしの身体を愛撫する。誘惑は、いかに相手を落とそうかと思いをかけめぐらしながら行う戦術などではないのだ。そこに声を含む「身体」が介在することで、わたしたちは自分の意に反して、他者を誘惑し、また誘惑に身体を拓くのである。

誘惑者とは誰なのか。わたしなのか、あなたなのか。あなたの身体か。こうした問いかけに簡単に答えられない偶発性(偶有性 contingency)こそが誘惑なのだ。そこにあるのは、良質な性行為に認められる自他の融解(の兆し)なのである。

より一般的に言えば、誘惑はエロスの世界に人を誘う。エロスについて、かつてわたしはつぎのように論じたことがある。

エロスは、個人間の濃密な関係(二人の世界)を強く示唆する。それはなによりも性を媒介とする偶発的な関係・状況である。エロスは主観的には性的な相互作用を通じて自己と他者の変容や融合を引き起こす。身体を越え、あるいは身体そのものが他者の身体を受け入れ物理的境界を越えて拡大していく、自己だけでなく他者もまたともに世界を共有し拡大していく、そうした世界構築の感覚をエロスが生み出す[田中 1997:290]。

エロスの世界における自他の交わりは、近代社会が拠って立つところの二元論的な主従の図式(理性による感情の支配、精神による身体の支配、男性による女性の支配、人間による自然の支配、ヨーロッパ人による非ヨーロッパ人の支配・・・、そしてロゴスによるエロスの支配)を揺るがすだけでなく、そうした二元論そのものに異議申し立てをする。

とはいえ、こうしたエロスの世界がつねに実現可能になると考えるのは楽観主義でしかない。多くの場合、その反対、すなわち性欲の一方的な充足や、性的快楽を与えることで支配しようと

する、一方的な支配と従属の関係、すなわち反エロスが中心的な位置を占めるというのが現実であろう。性交はときに一方的な侵犯でしかない。そこでは、身体はあくまで他者（の身体）を支配する道具でしかない。

主客の転換、相互転換、偶発性、そして自他の融解など、近代合理主義が批判してきた諸概念が濃縮している場所にこそエロスの世界が潜んでいる。そしてその導き手となるのが誘惑と誘惑する身体なのである。

誘惑と並んで注目したいのは信頼である。信頼は (confidence (in); trust (in); faith (in); reliance (on)) もまた、身体性こそ欠如しているが、誘惑と同じ主客の逆転を促す動詞である。すなわち、他者を信頼するという主体的な行為、意思是、同時にみずから「受動化」しようとする行為・意思、自律性を軽減する行為・意思でもある。信頼するとは、他者に依存する、身を他者に預けることだからである。このような意味で、信頼関係に基づくネットワークとは、誘惑と同じく主受の関係が相互転換的なネットワークだといえる。リングス[2003]も信頼と誘惑（ほかに性的オーガズムや笑い）の共通性を他者との関わり方との関係で論じている。

信頼やモラルとはコミュニティの人間関係のベースである。信頼することでケアを依頼できる。信頼という概念は、（信頼できる、したがって私と同等かそれ以上の能力のある）他者なしには考えられないが、他者にまったく依存しているわけではない。信頼するというのはきわめて能動的な行為だからである。こういう風に考えていくと、この概念は、基本的には個々人の対面的な関係に依存した状況的概念であるから先住民とかの概念に関係なく、開放的なコミュニティ概念（ネットワーク）にふさわしい。信頼は、既存の空間において生まれる排他的な概念とみなすべきではない。開放的な社会関係とみなすべき。

社会関係資本は、個人間のつながりから生じる互酬性と信頼性に関係しているが、ここでも相互の信頼関係が重要な意味をもつ。

#### 4 おわりに

ネットワークおよびネットワーク概念は、理論的かつ歴史的視点の両方から重要な概念であることは間違いない。とくに、それが、個人(エイジェント)に特定のアイデンティティを押しつけたり、それを引き受けないと主体として認められなかったりする、という近代社会におけるアイデンティティ・ポリティクスを克服し、より柔軟な人間関係を築くことができるのではないかと考えたい。誘惑や信頼を基盤とするネットワーク社会はアイデンティティ・ポリティクスを超えて共生社会を実現するのではないかと。もちろん、誘惑が本来持っていた否定的な意味（悪の道に誘う）や信頼と密接に関係する詐欺など、誘惑と信頼という概念には否定的、犯罪的な側面があることを無視できない。それにもかかわらず、報告者は、エイジェント間の誘惑と信頼に基づくネットワーク社会に近現代社会の諸問題を克服しようとする「進化」の種を認めるのである。

#### 参考文献

- エプシュタイン、A. L. 1983(1969)「ネットワークと都市社会組織」（三雲正博訳）J. C. ミッチェル編『社会的ネットワーク——アフリカにおける都市の人類学』国文社。
- 立川健二 1991『誘惑論——言語としての主体』新曜社。
- 田中雅一 1997「世界を構築するエロス——性器計測・女性の自慰・オーガズムをめぐる」船曳健夫ほか編『岩波講座文化人類学4 個からする社会展望』岩波書店。
- 2002「主体からエイジェントのコミュニティへ」田辺繁治・松田素二編『日常実践

- の エ ス ノ グ ラ フ ィ 』 世 界 思 想 社 。
- 2006a 「序章 ミクロ人類学の課題」田中雅一・松田素二編『ミクロ人類学の挑戦』  
世 界 思 想 社 。
- 2006b 「網子たちの実践と社会変化」同上。
- バーンズ、J. A. 2006 「ノルウェーの一島内教区における階級と委員会」（野沢慎司・立山  
徳子訳）野沢慎司編『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会  
関係資本』勁草書房。
- ボードリヤール、J. 1985 『誘惑の戦略』（宇波彰訳）法政大学出版局。
- ミッチェル、J. C. 編 1983 『社会的ネットワーク——アフリカにおける都市の人類学』（三雲  
正博ほか訳）国文社。
- リングス、アルフォ 2004 『信頼』（岩本正恵訳）青土社。